

<抜刷り>

# 富士見市立資料館調査研究報告

## 第2号

富士見市立考古館開館50周年記念号

2024.12.28

埼玉県 富士見市立資料館

講演記録	荒井幹夫	無我夢中 - 考古館創成期 -
講演記録	会田明	市民の好奇心が考古館を変えた
回想	和田雅子	とにかく熱かった
論文	和田晋治	縄文中期勝坂式期の猪装飾付土器
論文	早坂廣人	花積下層～関山式土器について
事例報告	駒木敦子	公民館で「社会教育施設の専門職」について考えた
研究ノート	山野健一	石鳥居が伝える江戸と鶴馬の結びつき
研究ノート	田ノ上和宏	入間ごぼうに関する調査と考察
資料紹介	佐藤一也	上内手遺跡第10地点出土の陶磁器
資料紹介	高橋宏之	南通遺跡出土の下小野系土器について
資料紹介	大野朝日	新田遺跡第1号住居跡について
★資料紹介	齋藤麻那	打越遺跡出土の押出型石匙について
資料紹介	菅沼慎太郎	南通遺跡近世墓坑と出土銭貨

※1 本文中の執筆者の肩書きは2024年3月31日時点です

※2 見開きの左側に偶数ページがくると見やすいように編集しています  
両面印刷する場合はこのページごと印刷することをおすすめします  
2ページずつ印刷する場合はこのページを飛ばして印刷してください

※3 抜刷り共通の表紙です。該当する記事に★を付けています

&lt;資料紹介&gt;

# おっこし おんだし いしさじ 打越遺跡出土の押出型石匙について

齊藤麻那（水子貝塚資料館）

## 1. はじめに

ここで紹介する資料は、富士見市打越遺跡の包含層から出土し、荒井ほか 1973：第 308 図 188 で縦形の石匙として報告された石器である。その後、資料観察のため来館した橋本勝雄氏により押出型石匙であることが指摘された（橋本 2023）<sup>(1)</sup>。今回、再実測の上、観察所見と現在の評価を報告する。

## 2. 石器の概要

大きさは長さ 6.1cm、幅 2.0cm、厚さ 0.9cm であり、石材は硬質頁岩を使用している。

形態は、左右対称で、断面形は凸レンズ型で、両側縁は薄く鋭利である（図 1）。

素材は縦長の剥片を使用し、上端部に自然面が残っている。

製作技術は両面加工で、縁辺はやや鋸歯状である。また、縁辺に再加工の痕跡があり、これによって石器が当初製作された時よりも小型化している可能性がある。また、再加工後に使用された痕跡も確認することができる。



図 1 打越遺跡出土押出型石匙 (1/2)

## 3. 押出型石匙とは

山形県高畠町押出遺跡で大量に出土する石器で、縄文前期後葉から末葉にかけて存在し、良質な硬質頁岩を使用する。また、形状は基部に三角形もしくは円形をつまみをもち、おおむね木葉形であるが（図 2）（大工原 2020）、使用され、再加工されることにより形状が柳葉型へと変化していくことがわかっている（図 3）（秦 2010、入江 2021）。製作技術としては、石器の両面を交互に押圧剥離する交互剥離加工でつくられている。これは石槍系押圧剥離技術と呼ばれており、石器の中央まで加工が施され、個々の剥離面が大きく、等間隔に稜線が並ぶもので、東北日本で見られる高度な押圧剥離技術である。関東以西には伝播していないものの、この技術で製作される押出型石匙は関東や中部地方でも出土例があり、威信材（大工原 2008）、または実用品として（橋本 2023）搬入されたと考えられている。また、関東地方では、搬入品の形態を真似して製作された模造品が出土することもある。

富士見市近辺の例として、ふじみ野市鷺森遺跡では押出型石槍の模造品が出土している。押出型石槍は、押出型石匙と同様に東北地方で石槍系押圧剥離技術によって製作される槍で、石匙と合わせて押出ポイントと呼ばれている。鷺森遺跡で出土したものは、直接打撃によって製作されているため、石槍形押圧剥離技術をもってつくられた押出型石槍の搬入品ではない。ここから、富士見市近辺でも東北地方から搬入された押出ポイントの形態を模倣していたことが推測できる。

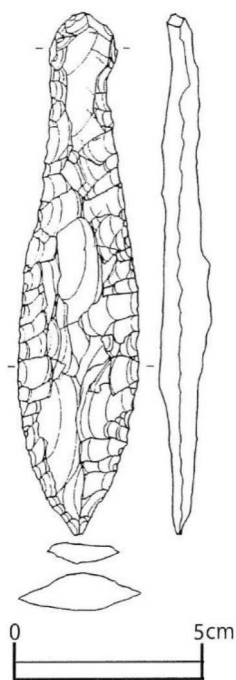


図2 押出遺跡出土押出型石匙完成品 (1/2)

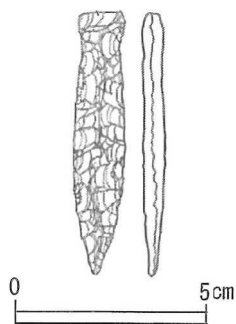


図3 押出遺跡出土押出型石匙刃部再加工品(1/2)

#### 4. 考察

打越遺跡から出土した押出型石匙の材質は、東北地方で採取される硬質頁岩である。また、石器の中央までよく加工され、一つ一つの剥離面が大きくほぼ等間隔な稜線が並ぶため、製作技術は東北日本特有の石槍系押圧剥離技術によって製作されているとよいだろう。

押出型石匙は縁辺の膨らんだ部分を刃部として、イネ科の植物の切断に伴い使用され（鹿又2009）、再加工によって刃部を再生し、繰り返し使用していたことが指摘されている（秦2010）。この刃部再生の繰り返しにより、縁辺のふくらみが細くなり、木葉形から柳葉形に形

態が変化していく。打越遺跡出土の押出型石匙も縁辺に再加工された痕跡があり、刃部再生されたものの可能性がある。

これらから、打越遺跡出土の押出型石匙は、東北地方で石槍系押圧剥離技術によって製作され、その後使用、刃部再生され小型化し、何らかの形で打越遺跡に搬入されたものと推定することができる。

#### 5. まとめ

ここまで、打越遺跡出土の押出型石匙について紹介してきた。石材、製作技術、再加工の痕跡などから、この石器は東北地方から打越遺跡に搬入されたものと推定した。

市内からは頁岩製で押出型石匙に似た形態の石器が他にも出土している。今後はそれらも検討し、この地域における押出型石匙について、理解を深めていきたい。

#### 註

(1) 橋本 2023 において、本文での言及は無いが、分布図及び表で、打越遺跡における東北頁岩製「尖頭形両刃石匙」（押出型石匙）の出土が示されている。

#### 引用・参考文献

- 荒井幹夫ほか 1978『打越遺跡』富士見市文化財報告(14)  
 入江直毅 2021「縄文石器を対象とした型式設定における一試論—縄文時代前期の押出型石匙を対象に—」  
 研究紀要[埼玉県埋蔵文化財調査事業団](35), 35-54  
 鹿又喜隆 2009「押出遺跡の石器の機能」『日本考古学協会 2009 年度山形大会 研究発表資料集』, 263-272  
 大工原豊 2008『縄文石器研究序論』  
 大工原豊 2020『考古学ハンドブック 20 縄文石器提要』ニューサイエンス社  
 橋本勝雄 2023「大木系石器群の関東以西への南下とその様態：石匙・石槍・槍状石器」茨城県考古学協会誌(35), 1-30  
 秦明繁 2010「押出遺跡の「両刃石匙」からみる石器消費形態」山形考古 9(2), 58-77